



1943（昭和 18）年度卒業生の学籍簿 —宮城高等女学校の「学校挺身隊」—

資料室 佐藤 亜紀

はじめに

一. 発見の経緯

「宮城女学校の学校日誌はありますか」との一件の問い合わせが、今回の学籍簿に関する調査の始まりだった。宮城学院は、1886（明治 19）年、現在の中学校・高等学校に相当する宮城女学校から始まり、2021 年で、創立 135 年目を迎えた。私は資料室の担当として勤務して 4 年目になるが、「学校日誌」が存在するかどうかわからなかった。そこで、丸山仁先生（宮城学院中学校高等学校教頭・社会科教諭、資料室運営委員）に、「学校日誌」について尋ねてみた。丸山先生は、倉庫を探してくださり、「学校日誌」は見つけることができなかったが、1940 年代に卒業した方々の「学籍簿」があると教えてくださった。そこで早速、中高倉庫に伺い、「学籍簿」の二つの束を確認した。

二. 学籍簿五冊

ここに紹介する資料は二つの綴り込み表紙に綴じられ、ビニールテープで括られていた。一つは、「高等女学校学籍簿 昭和十六年度 全十七年度 全十八年度」（以後、A と呼ぶ）、もう一つは「高等女学校卒業学籍簿 昭和十九年度」（以後、B と呼ぶ）と背表紙に書かれていた。A には、綴り込み表紙を付して綴じられた、外側の綴り込み表紙の背表紙に書かれた年代の三冊の学籍簿が、また B にも同様に、二冊の学籍簿がそれぞれ挟み込まれていた。この五冊の「学籍簿」の表紙に書かれた卒業年度を簿冊名称とし、入学年月・卒業年月・在籍生徒数を加えて示したのが表 1 である。1940（昭和 15）年 4 月に入学し、1944（昭和 19）年 3 月に四年生で修了した生徒達の学籍簿は見当たらなかった¹。

三. 1943（昭和 18）年度卒業生の「学籍簿」について

現在資料室では、五冊の「学籍簿」をデータ入力し、今後は写真撮影を行ってデジタル資料化することを検討している。今回、本年報では、③の「1943（昭和 18）年度卒業生学籍簿」を取り上げる。その理由は、1943（昭和 18）年度は、宮城県の多くの高等女学

¹ 1940 年 4 月入学生が四年生に進級した 1943 年 4 月、「中等学校令」により宮城女学校は五年制から四年制に変わった。それにより、翌年 3 月、(1)四年生で修了する、(2)五年生へ進級する、(3)専攻科に進学する という 3 つの選択肢が示された（『戦時下の宮城学院』8 頁）。見当たらない学籍簿というのは、(2) 以外を選択した生徒たちのものである。

表1

	簿冊名称	入学年月	卒業年月	在籍 生徒数(名)
①	1941(昭和16)年度 卒業生	1937(昭和12)年4月	1942(昭和17)年3月	42
②	1942(昭和17)年度 卒業生	1938(昭和13)年4月	1943(昭和18)年3月	50
③	1943(昭和18)年度 卒業生	1939(昭和14)年4月	1944(昭和19)年3月	92
④	1944(昭和19)年度 卒業生 五年生	1940(昭和15)年4月	1945(昭和20)年3月	43
⑤	1944(昭和19)年度 卒業生 四年生	1941(昭和16)年4月	1945(昭和20)年3月	188

校が、卒業と同時に卒業生を挺身隊として軍需工場（東京第一陸軍造兵廠仙台製造所）に送り出した年度だからである。本校でも挺身隊が組織されたが、その記録について本校の年史等での記載は無い（『宮城学院七十年史』、『宮城学院八十年小誌』、『天にみ栄え』等）。唯一記載があったのは、『戦時下の宮城学院』（2002年11月刊行）、『戦時下女学校の学徒勤労働員』（2004年10月刊行）の二冊である。そこには「学校挺身隊に89名中16名が参加」と書かれてあった。しかし、今回、学籍簿のデータ入力を行う中で、1943（昭和18）年度卒業生の「卒業後の状況欄」に「挺身隊造兵廠」「挺身隊」と記載されている生徒は30名に及んだ。少々の数字の差異ならわかるが、16名と30名では倍近く違う。さらに、その記載の仕方に上記のような二種類の書き方がなされているのはなぜかという疑問も新たに浮かんできた。

一つの項目で、二種類の書き方がなされているのは、他にもいくつかの項目に見られた。例えば、「卒業後の状況欄」や「卒業年月日」の記入の有無についてである。表2は、この二通りの記載方法を整理したものであるが、これを見て明らかのように、パターンAとパターンBが項目ごとに截然と分れている。人数はパターンAが41名、パターンBが44名、それ以外が7名である。7名の内訳は、パターンA・Bの規則性から外れる者が3名、五学年次の成績表の記載がない者が4名である。以上のことから、1943（昭和18）年度は、ニクラス制で、学籍簿の内容に書き方が二通りあるのは担任の違いによるものと推測される（写真1・2）。

この学年の生徒たちが入学した年から卒業するまでの歩みの中で、「戦争」が学校生活に入り込んでくる様子を「学籍簿」から読み取るとともに、資料室に保管する資料を参考にしながら、この年度の「学籍簿」を精査してみたい。

卒業後ノ状況	性行調査表						成績表					
	第1年	第2年	第3年	第4年	第5年	学年項目	第1年	第2年	第3年	第4年	第5年	学年
挺身隊造兵廠						性	77	77	67	72	71	83
						質品	75	77	81	80	80	80
備考						行勤	70	67	72	72	72	72
						情	78	75	81	80	80	80
所属教會						言	82	82	58	58	58	56
						語	82	82	58	58	58	56
年						容	80	76	73	70	57	65
						候	50	59	65	50	53	60
日						長	55	59	68	55	69	72
						所	77	77	73	73	70	71
						短	62	72	78	70	71	71
						考	72	83	74	71	80	76
						備	72	76	85	76	76	76
						考	1179	1196	1022	1345	1345	1345
						特	72	69	72	68	71	71
						備	89	83	84	45	45	45
						考	72	77	68	39	39	39
						備		10	10	10	7	7
						考		22.7	21	21.8	21.3	21.3
						備		1378	146	1216	1251	1251
						考		22	15	3	11	6
						備		167	76	5	29	61

写真1 「パターンA」の生徒の成績表

表2

項目	パターンA	パターンB
卒業年月日	記入あり	記入なし
「卒業後の状況」が挺身隊の場合	挺身隊造兵廠	挺身隊員
「卒業後の状況」が本校専攻科進学の場合	宮城〇〇科	本校〇〇科入学 本校専攻部〇〇科入学
「成績表」武道教練科目の表記	体武教	武道教練
五学年次の性格	記入なし	記入あり

卒業後ノ 状況	性 行 調 査 表						成 績 表						
	第 五 學 年	第 四 學 年	第 三 學 年	第 二 學 年	第 一 學 年	學 年 項 目	第 五 學 年	第 四 學 年	第 三 學 年	第 二 學 年	第 一 學 年	學 年 項 目	
挺身隊員	海長					性	81	78	93	88	80	89	視 修 作 公
							83	86	85	87	84	84	書 身 法 科 民 語 國
備 考	方正					質 品	80	83	82	88	40	讀 講 文 漢 文 法 字 方 數 解 譯 語 會 法 文 字 習	
							83	81	83	85	88	88	讀 講 文 漢 文 法 字 方 數 解 譯 語 會 法 文 字 習
所 屬 教 會	活動					行 動	85	85	89	93	42	方 數 解 譯 語 會 法 文 字 習	
							80	84	84	87	87	87	方 數 解 譯 語 會 法 文 字 習
年 月 日	了					情 言	72	72	87	82	84	87	語 文 字 習
							80	95	81	91	89	89	語 文 字 習
年 月 日	端正					語 容	78	59	81	87	88	88	地 理 文 學 科 書 事 首 術 看 裁 手 算 教 體 育 遊 戲 點 均 定 數 徒 生 席 在 席 出 可 控 日 課 日 課 時 堂 控 數 度 缺 有 缺 日 席 缺 數 時 度 刻 運 德
							72	72	65	63	80	83	83
年 月 日	愉快					儀 長 所 短 所	78	78	81	86	84	40	地 理 文 學 科 書 事 首 術 看 裁 手 算 教 體 育 遊 戲 點 均 定 數 徒 生 席 在 席 出 可 控 日 課 日 課 時 堂 控 數 度 缺 有 缺 日 席 缺 數 時 度 刻 運 德
							82	82	82	87	80	80	80
年 月 日						備 考	87	87	86	87	45	45	地 理 文 學 科 書 事 首 術 看 裁 手 算 教 體 育 遊 戲 點 均 定 數 徒 生 席 在 席 出 可 控 日 課 日 課 時 堂 控 數 度 缺 有 缺 日 席 缺 數 時 度 刻 運 德
							82	81	82	82	80	80	80
年 月 日						特 殊 味 地 點 等 好	83	40	11	9	6	6	地 理 文 學 科 書 事 首 術 看 裁 手 算 教 體 育 遊 戲 點 均 定 數 徒 生 席 在 席 出 可 控 日 課 日 課 時 堂 控 數 度 缺 有 缺 日 席 缺 數 時 度 刻 運 德
							82	82	86	86	84	84	84

写真2 「パターンB」の生徒の成績表

1. 1943 (昭和 18) 年度卒業生「学籍簿」データ (68 頁から 72 頁)

番号	入学年月日	卒業年月日	入学前の学歴		親の職業	卒業後の状況
1	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	大谷小学校卒業	雑貨商	挺身隊造兵廠
2	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	上杉山通小学校卒業	鉄道機関士	挺身隊造兵廠
3	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	北五番丁小学校一年修了	無職	挺身隊造兵廠
4	昭和16年6月21日	昭和19年3月8日		大阪女学院ヨリ第三学年ニ転入		挺身隊造兵廠
5	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	商業	挺身隊造兵廠
6	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東二番丁小学校卒業	菓子商	挺身隊造兵廠
7	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東六番丁小学校卒業	官吏	挺身隊造兵廠
8	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東二番丁小学校卒業	会社員	挺身隊造兵廠
9	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東二番丁小学校卒業	重炭商	挺身隊造兵廠
10	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	女川小学校卒業	会社員	挺身隊造兵廠
11	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	東北学院書記	挺身隊造兵廠
12	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	北五番丁小学校高等科一年修了	農業	挺身隊造兵廠
13		昭和19年3月8日				挺身隊造兵廠
14	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	榴ヶ岡小学校卒業	会社員	挺身隊造兵廠
15	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	原町小学校卒業	鉄道官吏	挺身隊造兵廠
16	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	仙台機関庫炭水手	挺身隊員
17	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	鉄道局機関区員	挺身隊員
18	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業	会社員	挺身隊員
19	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	教員	挺身隊員
20	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業	無職	挺身隊員
21	昭和14年4月10日		昭和14年3月	立町小学校卒業	造花商	挺身隊員
22	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	官吏	挺身隊員

23	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業		帝国地方行政学会社員	挺身隊員
24	昭和14年4月10日		昭和14年3月	東二番丁小学校卒業		公吏	挺身隊員
25	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業		大工職	挺身隊員
26	昭和14年4月10日		昭和14年3月	北五番丁小学校高等科一年修了		農業	挺身隊員
27	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴ヶ岡小学校卒業		会社員	挺身隊員
28	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴ヶ岡小学校卒業		履物商	挺身隊員
29	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業		鉄道官吏	挺身隊員
30	昭和14年4月10日		昭和14年3月	向山小学校卒業		無職	挺身隊員 三月入隊
31	昭和14年4月10日		昭和14年3月	男師附属小学校卒業		官吏	本校英文科入学
32						通信省官吏	本校英文科入学
33	昭和14年4月10日		昭和14年3月	宮師附属小学校卒業		官吏	本校音楽科入学
34	昭和14年4月10日		昭和14年3月	東京市立第三荏原小学校卒業		牧師	本校音楽科入学
35	昭和17年5月10日			上海居留民團立日本高等女学校		会社員(士族)	本校家政科入学
35	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴ヶ岡小学校卒業		公吏	本校家政科入学
37	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業		亜炭商	本校家政科入学
38	昭和14年4月10日		昭和14年3月	志津川小学校卒業		農	本校家政科入学
39	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴岡小学校卒業		麵類商	本校家政科入学
40	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴岡小学校卒業		薬剤師	本校家政科入学
41	昭和14年4月10日		昭和14年3月	木町通小学校卒業		医療器械商	本校家政科入学
42	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業		司法書士	本校家政科入学
43	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業		官吏	本校国文科入学
44	昭和14年4月10日		昭和14年3月	荒町小学校卒業		河北新報社員	本校専攻科音楽科入学
45	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業		画家	本校専攻部家政科入学

46	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業		米穀商		本校専攻部家政科入学
47	昭和14年4月10日		昭和14年3月	槻木小学校卒業		新聞取扱		本校専攻部家政科入学
48	昭和14年4月10日		昭和14年3月	荒町小学校卒業		文房具商		本校専攻部家政科入学
49	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業		会社員		本校専攻部家政科入学
50	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業		官吏		本校体育科助教
51	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	片平丁小学校卒業		会社員/兄		宮城音楽科
52	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	荒町小学校卒業		商店員		宮城家政科
53	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	上杉山通小学校卒業		会社員		宮城英文科
54	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	向山小学校卒業		会社員		宮城家政科
55	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	片平丁小学校卒業		会社員		宮城家政科
56	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	木町通小学校卒業		家具製作販売		宮城家政科
57	昭和17年1月10日	昭和19年3月8日		日出高女ヨリ第三学年二転入		会社員		宮城家政科
58	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業		官吏		宮城家政科
59	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	木町通小学校卒業		物品販売		宮城家政科
60	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業		無職		宮城家政科
61	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	和瀬小学校卒業		材木商		宮城家政科入学
62	昭和18年4月1日	昭和19年3月8日				日本勧銀宮城支店		宮城国文科
63	昭和15年9月2日	昭和19年3月8日		遺愛女学校ヨリ第二学年二転入		貿易商		東京興健女専
64	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東六番丁小学校卒業		牛豚肉商		東北女子職業学校
65	昭和15年4月8日	昭和19年3月8日		岡山県第一岡山高女ヨリ第二学年二転入		牧師		宮城女子専門学校
66	昭和18年4月1日	昭和19年3月8日				無職		女子師範
67	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	片平丁小学校卒業		官吏		東北女子職業学校
68	昭和14年4月10日		昭和14年3月	塩釜第三小学校卒業		養理業		県立保健婦学校入学

69	昭和14年4月10日		昭和14年3月	立町小学校卒業	商業	松操学校入学
70	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	片平丁小学校卒業	会社員	東京青山学院
71	昭和14年4月10日		昭和14年3月	南材木町小学校卒業	無職	東北女子職業学校入学
72	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	片平丁小学校卒業	貸室業	宮城女子専門学校
73	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	立町小学校卒業	会社員	家事手傳
74	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴岡小学校卒業	呉服商	
75	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	田尻小学校高等一年修了	無職	家にて農事手伝
76	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	東小野田小学校卒業	農	病氣
77	昭和14年4月10日		昭和14年3月	立町小学校卒業	質屋営業	
78	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	菓子商	
79	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	多賀城小学校高等一年修了	官吏	病氣
80	昭和14年4月10日		昭和14年3月	榴岡小学校卒業	会社員	
81	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	榴岡小学校卒業	竹細工商	萱場製作所
82	昭和14年4月10日		昭和14年3月	六郷小学校高等一年修了	公吏	
83	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業	会社員	
84	昭和13年4月8日	昭和19年3月8日	昭和13年3月	荒町小学校卒業	建築設計請負業	病氣
85	昭和14年4月10日	昭和19年3月8日	昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	教員	家庭 家事手伝
86	昭和14年4月10日		昭和14年3月	連坊小路小学校卒業	縮商	
87	昭和14年4月10日		昭和14年3月	片平丁小学校卒業	会社員	
88	昭和14年4月10日		昭和14年3月	上杉山通小学校卒業	教員	
89	昭和14年4月10日		昭和14年3月	東二番丁小学校卒業	無職	
90	昭和14年4月10日		昭和14年3月	東六番丁小学校卒業	貸室業	
91						第四学年次成績のみ記入有

92	昭和14年4月10日		昭和14年3月	東六番丁小学校卒業	官吏	
----	------------	--	---------	-----------	----	--

※「学籍簿」原本は、あいうえお順に綴じられているが、個人の特定を避けるために「卒業後の状況」(挺身隊造兵廠→挺身隊員→本校専攻科進学→他校進学→その他)順に並び変えた。本年報で紹介するデータは、入学年月日・卒業年月日・入学前の学歴・親の職業・卒業後の状況とし、個人を特定できるような情報は掲載しない。

2. 入学 一出身小学校一

『宮城学院七十年史』（1956年8月刊行、30頁）によると、創立以来、一学級分の生徒しか募集しなかった本校が、1939（昭和14）年の新入生からはじめて二学級分（100名）を募集することになった²。入学年月日は昭和14年4月10日である。入学年月日の記載がある生徒は、学籍簿在籍生徒数92名中81名で、その出身小学校を示したのが表3である。

表3 出身小学校とその人数

出身小学校	人数(名)	出身小学校	人数(名)
連坊小路小学校	13	大谷小学校	1
片平丁小学校	11	女川小学校	1
上杉山通小学校	9	志津川小学校	1
榴岡(榴ヶ岡)小学校	9	槻木小学校	1
東二番丁小学校	5	和渕小学校	1
東六番丁小学校	4	塩釜第三小学校	1
立町小学校	4	東小野田小学校	1
荒町小学校	3	田尻小学校(高等科一年修了)	1
木町通小学校	3	多賀城小学校(高等科一年修了)	1
向山小学校	2	六郷小学校(高等科一年修了)	1
原町小学校	1	仙台市外小学校	10
南材木小学校	1	第三荏原小学校(東京)	1
男子師附学校附属小学校	1	県外	1
宮城師附学校附属小学校	1		
北五番丁小学校(高等科一年修了)	3		
仙台市内小学校	70		

それ以外の11名はというと、前年度入学者1名、他校よりの転入学者7名（昭和15年度以降）、残り3名については入学年月日欄が空白のままであった。

入学者81名について表1からわかることとして、仙台市内の小学校出身者が圧倒的に多く、86%（81名中70名）であった。仙台市外の地域としては、黒川郡（大谷小）、牡鹿郡（女川小）、本吉郡（志津川小）、柴田郡（槻木小）、桃生郡（和渕小）、塩釜市（塩釜第三小）、加美郡（東小野田小）、遠田郡（田尻小）、宮城郡（多賀城小）、名取郡（六郷小）

² 『河北新報』宮城女学校生徒募集広告によると、昭和15年度高等女学部生徒募集人数は80名（1940年2月）、昭和16年度募集人数は150名（1941年2月）、昭和17年度募集人数は200名（申請中）（1942年2月）であった。『七十年史』（30頁）に昭和14年100名の募集とあるが、『河北新報』の昭和15年募集人数が80名であったことから、「100名」は「80名」の可能性もある。

であった。特に、牡鹿郡（女川小）、本吉郡（志津川小）、桃生郡（和湊小）、加美郡（東小野田小）、遠田郡（田尻小）出身者は、「学籍簿」から、保証人方に下宿をして本校へ通っていたことがわかった。

発見された五冊の学籍簿で、各出身小学校の割合や出身小学校の地域を比較するのも意義あることだと思う。今後取り組みたい。

3. 宮城女学校への視察 ―聖書の授業が正課から課外へ―

1939（昭和14）年、生徒たちが入学して二ヶ月が過ぎようとしていた頃、宮城県に文部省の視察官が訪れた。その二日後、宮城女学校に来校したことが『天にみ栄え』（1987年3月刊行、558頁-559頁）に、校長クリーテの1939年6月18日付書簡（原文は英語）を引用して詳しく記されている。

文部省の視察官が仙台に来た。全国を十二地区に分け、定例の視察を行う他に、年に一度各地区をまわる視察団をつくった。仙台では今回が初めてである。県下の女学校の全校長が県立第一女学校に集められたところへ、八人の政府側の視察官と三、四人の県側の教育関係者が来た。その中の一人は軍人で、最近まで地方連隊にいた人である。開会の挨拶の中で、学校の教育に国民精神の動員が欠けていると指摘した。また五月二十二日に天皇が中学生の軍事教練を親閲し、その際勅語（「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」）を賜わった事実に言及した。また、荒木文相の、教育についての十四ヶ條を詳しくのべ、教育に政府が重点をおいていることを強調した。そして我が校には二日後に視察団が来ることを予告した。三人の視察官が来校した時、私たちは英語で礼拝をしていた。礼拝後彼等は教育の方針について質問し、学則、教案を検討した後、授業を見学した。（中略）彼等の批評の要旨は次の通りであった。この学校は二つの教育目標を追っていること、一つは聖書の教えとキリスト教であり、もう一つは国民精神である。第一の方は徹底しており、音楽を通してそれが浸透している、それに比べれば第二の方は薄いように思われる。この二つの目的をもっと調和させてほしいということであった。また国の祝日のもち方について、讚美歌、聖書朗読、祈祷という形をやめて、今後は国歌と教育勅語と適切な講話で式を挙げた方がよいと忠告を受けた。（中略）また彼等は当校で天皇の写真（御真影）を県に請求したかどうか尋ねた。「していないと答えて、問題はそのままになっているが、この問題は又再提起されるだろう。」

『橄欖』二十一号（1940年2月発行）「校報欄―学校日誌―」³の6月8日の項に、「督学官来校、視察セラル」と記されていることから、クリーテ書簡にある、「我が校には二日後に視察団が来る」日とは、6月8日のことで、文部省派遣の視察官というのは、正式

には「督学官」であった。そして、仙台に視察団が来たのは6月6日と言えよう。

『天にみ栄え』(560頁)に、翌1940年6月に県の教育長が来校し、一年前の追加調査が行われたとある。教育長から、朝の礼拝には宮城遥拝と国歌斉唱をしているかという質問があり、国の祝日にはしているが毎朝はしていないとクリーテは答えた。さらに、7月23日には、東北学院、宮城女学校、バプテスト派の学校(尚綱女学校)の代表者が県庁に呼ばれ、カトリックの学校(仙台高等女学校)も陪席させられ、提言がなされ、実行を要請されたことも記されている。

1939年6月の教育状況総合視察後、県が「ミッションスクール」の校長を集め、どのような対応を行ったかを文部省に報告した文書が、国立公文書館に保存されている。同文書によれば、この「関係学校長会議」の日付は7月26日(『天にみ栄え』では、7月23日)となっている。この文書は、宮城女学校だけでなく、他の二校(東北学院・尚綱女学校)にとっても、戦時中のミッションスクールとしての対応を知る貴重な文書であるので、全文を翻刻し示す(資料1)。

文書の前文部分に注目すると、「懇談的ニ指示致シ、何レモ了承、直チニ実行ニ移スコトニ決定相成」とあるが、学校側としては「何レモ了承」しかとる道はなかったのであろう。三校の学校長らは、「関係学校長会議」の内容をそれぞれの学校に持ち帰り、学校としての今後の方針を話し合ったことであろう。その結果として、宮城女学校は、1941年4月から聖書の授業が正式に課外科目へとになっていくのである。この学年の学籍簿に見られる聖書成績欄は、まさにこの決定を反映したものとなっている。さらに、「二、具体的方法1礼拝ニツイテ」の項目で、「礼拝ヲ行ヒ、讚美歌等ヲ歌フ場合ハ必ズ宮城遥拝、君ヶ代奉唱等ヲ先ニ実施」という指摘に対し、1941年3月の第49回卒業式で、まさにその通りに今までの式次第が変更された(写真3)。そして、「二、具体的方法3奉安殿ニツイテ」の項目での、「必ズ近キ将来ニ於テ御真影ヲ拝戴シ、且成ル可ク早く奉安殿ヲ設ケ」の指摘に対しても、その準備が始められた(写真4)。ただし、奉安殿の完成は1942年2月であった。

また、1900(明治33)年の一年制特別聖書科に始まり、多くの婦人伝道者を世に送り出した聖書専攻科は1941年3月をもって廃止された。『天にみ栄え』(570頁)によると、聖書専攻科は、次第に在籍者数を減じ、ついには卒業生のない年さえあり、このことも廃止の一因となったとのことである。

創立以来、合衆国改革派教会の援助を受け、キリスト教主義女子教育を行ってきた本校にとって、この時代、学校を守るために難しい選択を重ねなければならなかったのである。

³ 『橄欖』本年報35頁～63頁で紹介する。文学的な内容を掲載した冊子として刊行後、1940(昭和15)年5月～1944(昭和19)年3月まで、毎月一回、見開きB4版4頁の体裁を原則とした学内広報。

資料一

学秘二二二一號

昭和十五年八月二日

宮城県知事(角印「宮城県知事印」)

文部省普通学務局長殿

管下所謂「ミッションスクール」監督ニ関スル件

昨年六月貴省ニ於テ本県下教育状況綜合視察ノ際ノ御指示モ有之所謂「ミッションスクール」ノ教育刷新ニ関シテハ鋭意検討研究致居候処過般各關係学校長ヲ召集シ左記事項懇談的ニ指示致シ何レモ承直チニ実行ニ移スコトニ決定相成一般社会並父兄側ノ意嚮モ最モ時宜ニ即シ適當ナル方針並措置トシテ賛意ヲ表シ居ル模様ニ有之此段御参考迄及報告候

記

一、一般方針

教育目的ノ中心点ヲ「皇国民ノ鍊成」ニ置クベキヲ強調ス、而シテ宗教ノ為ノ教育ニアラズシテ皇国民ノ教育ノ為ノ宗教ノ手段タルヲ明カニスルコト

二、具体的方法

1 礼拝ニツイテ

礼拝ヲ行ヒ、讚美歌等ヲ歌フ場合ハ必ズ宮城遙拝、君ヶ代奉唱等ヲ先ニ実施シ国民精神ノ涵養ニ資セシムルコト

2 聖書教育ニツイテ

(イ)修身科ニ於テハ専ラ国民道徳ノ要旨ヲ教ヘ聖書ハ別ニ時間ヲ設ケテ教授スルコト

(ロ)聖書教授ハ必ズ課外ニ於テナスコト

3 奉安殿ニツイテ

必ズ近キ将来ニ於テ御真影ヲ拝戴シ且成ル可ク早く奉安殿ヲ設ケ学校教育ノ中心タラシムルコト

4 諸行事ニツイテ

正課ニ於テモ課外ニ於テモ教育ノ諸行事並諸施設ハ凡テ皇国ノ道ニ帰ニスルノ精神ヲ以テ取り扱フコトニ努ムルコト

5 東北学院ニ於テ其ノ財団法人東北学院寄附行為ノ條章中第二章(目的及事業)第三

條ノニ「本財団ノ目的ハ、一、基督教主義ニ従ヒ完全ナル普通教育ヲ施スニアリ、二、

聖書ニ合メル基督教ニ基キ徳育ヲ施スニアリ、三、将来基督教教師タラントスル者或ハ其他ノ職業ニ従事セントスル者ニ充分ナル高等教育ヲ施スニアリ〔第四條ノ二〕東北学院及東北学院中学部ハ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉体シテ教育ヲ施スモノトスニアリ、我カ国教育ノ根本カ教育勅語ノ聖旨奉戴ニ基ク觀念ヲ輕視スルノ觀アルヲ以テ、第二章第三條ノ第一号ニ現行第四條ノ一ノ規定ノ趣旨ヲ掲ケ第四條ノ二ハ削除スルコト

三 関係学校長会議

七月二十六日 於県庁学務部長室

出席者

出村東北学院長、クリーナ宮城女学校長

高橋尚綱女学校長

外ニ仙台高等女学校長ヲモ便宜参会セシメタリ

(旧字体は新字体になおし、読点を適宜補つた)

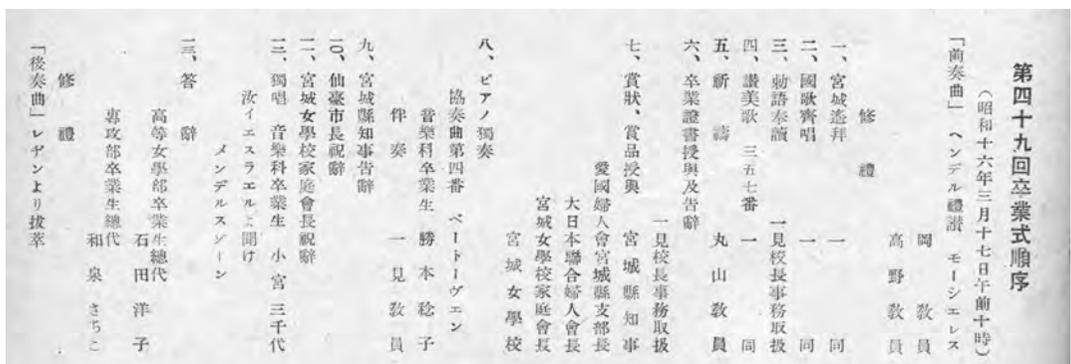
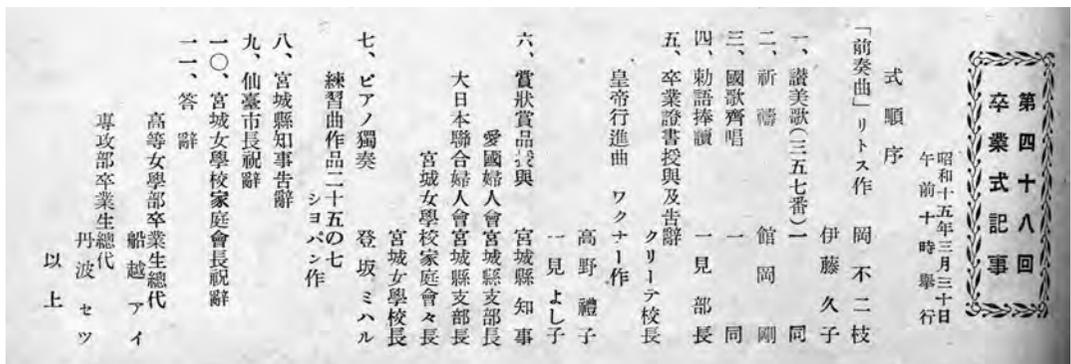


写真3 卒業式記事

上段：第四十八回卒業式 昭和十五年三月三十日(『橄欖』第1号 1940年5月)

下段：第四十九回卒業式 昭和十六年三月十七日(『橄欖』第20号 1941年4月)

學校日誌	
六日	合同職員會 報國園落成増産運動、宮城外苑整備事業來仕等につき協議す合同禮拜 メソヂスト教會森田牧師の説教ありたり。
八日	文部省森長博氏新學年入學試験状況取調のため來校せらる。
十日	校外調育協議會宮城圖書館に於て開催大越先生出席せらる。
十二日	増産園藝指導として遠藤中吉先生を依頼 本日より校内各地に園藝地の設備に着手せり。
十三日	校友會及女子青年會を解散し宮城女學校報國園を組織する旨生徒一同に報告す。
十九日	仙臺鐵道局主催交通道徳懇談會を商業會議所に開催大越先生出席せり。
二十日	奉安殿御造營工事につき石井組仙臺代表河合氏と家庭會委員會合し懇談せり。
廿二日	青少年に賜りたる勸語御下賜三周年記念奉讀式を行ふ。
	昇大祭 クリーテ先生説教あり音楽賞(登坂とまわ)シエクスピア賞(松隈ツネ子)の授與式を行

【3】 號 九 十 第		校學女城宮 櫓 檝		日五十月四年七十和昭	
<p>東亞の日本國民を教育するものは、祖國に盡すことを教へるばかりでなく、東亞の民を愛し、歐米諸國に覺醒を促し、新しき約を見せしむるそれだけならぬ。斯る大使命を達成する爲には日本人自身の精神教養を層一層高め、認めなければならぬ。實は教養ある日本の紳士淑女によつてのみ斯る目的が完遂されると信ずる。茲に教育の重要性が痛感されます。</p>					
學校日誌					
二月十一日	追繼に於ける祖國祭に生徒一同參加	二月十四日	全校生徒耐寒遠足午前七時半集合福田町にて下車徒歩博愛神社參拜	二月十六日	シンガポール陥落祝賀式御造營中なりし奉安殿竣工式舉行
二月十八日	職捷第一次祝賀式開催	二月廿五日	午後五時より家庭會理事會開催	二月廿六日	地久節學式 後女學部卒業生謝恩會
二月廿二日	第二次職捷祝賀式	二月廿六日	第三期終業式並に一見、原田、丸山、金子、野村五先生の送別式	二月廿七日	午前十時より高女部第五十回卒業式舉行
二月十九日	専攻部入學考査	二月廿二日	午前九時より高女部第一學		

写真4 奉安殿の建設

上段：奉安殿造營工事に関して 五月二十日(『檝櫓』第14号 1941年6月)
 下段：奉安殿竣工式舉行 二月十六日(『檝櫓』第19号 1942年4月)

4. 第五学年次の成績表 一英語の授業が選択科目へ 軍事教練科目の出現一

次に、第五学年次成績表欄に注目する。写真1・2を見ると、本来第五学年次の成績を記入するはずの欄が空欄とされ、予備に置かれた欄が第五学年次の成績記入欄となっている。そして、空欄とされた本来の第五学年次成績記入欄には、第一学年次から第四学年次までには見られなかった科目名や複数あった科目を一つにまとめた記号があり、その評点が、予備に置かれた第五学年次欄に記入されている。第五学年次成績欄の主な変更点を以下に示す。

1. 第四学年次までは2～3科目ある国語科目が、第五学年次では1科目にまとめられる
2. 第四学年次までは2～4科目ある英語科目が、第五学年次では1科目となり、さらに被服科目との選択制になっている
3. 武道教練(体・武・教)という科目が全員に新設される
4. 理科が物象と生物の2科目となる

上記、第2項目については『宮城学院七十年史』、第3項目については『宮城学院八十

年小誌』『橄欖』にその状況等が掲載されていたので、それぞれ以下に記す。第1・第4項目について、関連資料を見出すことはできなかった。

『宮城学院七十年史』によると、昭和14年度入学生が四学年に進級した1942（昭和17）年8月8日、宮城県中等学校長会議で英語を随意科目とすることが決議された（ただし、高等女学校のみ）のを受けて、本校は次年度（五学年）から英語を選択科目とし、英語か裁縫のいずれかを選択させることとした。選択者の内訳は、学籍簿92名中、英語科目選択者49名、被服科目選択者38名、空欄5名であった。

『宮城学院八十年小誌』（1966年10月刊行、55頁）に、1943（昭和18）年4月から軍事教練が正課となったことが記されている。本校の軍事教練の内容については『橄欖』第21号（昭和18年3月13日発行）に掲載されていた。それによれば、前年の11月16日、県立第一中学校教官（いわゆる「配属将校」）都築大尉を招き、その後十日間にわたり各個教練、閲兵、分列行進が行われた。東北地方最初の女学生軍事教練実施なのだそう。春からは、帰還中尉諸根武雄の指導の下に、毎週月曜の朝30分実施、また、薙刀講習会、弓道寒稽古なども実施されたようである。

さらに、この年、「中等学校令」の改定により、本校は、これまでの各種学校のまま存続するわけにはいかなかった。校名を「宮城女学校」から「宮城高等女学校」と改称し、宮城県の高女学校学則をほとんど逐条そのまま採用した新学則で、定員千名・四学年制・五学級編成へと改められた。

キリスト教主義に基づく教育を行ってきた宮城女学校は、これまでその設立目的に従い、各種学校として独自の教育を行ってきた。しかし、1941年4月に聖書の授業を正課から外したことで、各種学校にとどまる意味はなくなっていた。そこに、高等女学校に改めるか廃校にするかの選択が迫られたことになったのである。「中等学校令」のもと、本校の「寄附行為」条文中から「基督教ノ精神ニ基キ品性ヲ涵養スル」が削除されたのは、学校存続を図るためのやむを得ざる措置であったということになる。

5. 卒業後の進路について

1939（昭和14）年に入学し、国の政策により本校の教育内容が大きく変化した中で五年間の学校生活を送った生徒たちが、卒業後に進もうとした道はいかなるものであったのだろうか。学籍簿の「卒業後の状況」を表4に、またその中で最も多かった「本校専攻科進学者内訳」を表5に示した。

表4②「挺身隊造兵廠」・③「挺身隊」については次章で説明することとし、ここでは、先ず、表4に示した①「本校専攻科進学」の内訳から見ることにする。

前章でも述べたように、本校は、1943（昭和18）年、宮城女学校から「宮城高等女学校」

へと改編・改称された。それに伴い、専攻部も「専攻科」へと改称され、従来の家政科・英文科・音楽科に加え、「国語科」が新設された。生徒たちが五学年次の時である。『橄欖』22号（昭和18年7月10日発行）には、4月5日に行われた入学式の記事があり、専攻科入学者数は、家政科56名、国文（国語）科31名、英文科4名、音楽科7名であった⁴。さらに、『橄欖』23号（昭和19年3月25日発行）では、表5にある「本校専攻科進学者」らが含まれる「1944（昭和19）年度入学試験状況」の記事があり、専攻科合格者数は、家政科60名、国文（国語）科40名、英文科12名、音楽科20名であった。

1943年度、1944年度の専攻科入学者数を見てみると、家政科が圧倒的人气で、次が国語科である。しかし、表5の「本校専攻科進学者内訳」数は、家政科への進学者は21名と多いが、国語科への進学者が2名であるのは驚きである。すなわち、国語科には他校からの進学者が多かったということになる。

本学学芸学部人間学科大平聡教授によると、「本校の専攻科、特に英語科は、多くの卒業生を教員として送り出してきた。英語科目の選択制により、英語教員の需要減が見込まれる。そこで本校が起死回生を図ったのが、国語専攻科を新設し、国語教員を養成することであった。しかし、本学からの進学者が2名というのは驚きである。本校は、そのため、学校工場を開き、専攻科生をそこで勤労させながら、教員採用試験の準備をさせようとした。その努力により、国語専攻科は、1946年に中等教員無試験検定資格が許可された」とのことであった。出身女学校にかかわらず、国語専攻科入学生たちに教員採用試験を合格させ、無試験検定資格を得ることで専攻科の存続意義を確保したいということだったのであろう。

また、国語科の中等教員無試験検定資格取得について、『天にみ栄え』（575頁）に次のように記されている。

表4 「卒業後の状況」

	卒業後の状況	人数(名)
①	本校専攻科進学	32
②	挺身隊造兵廠	15
③	挺身隊	15
④	他校進学	10
⑤	その他	20
計		92

表5 「本校専攻科進学者内訳」

	専攻科	人数(名)
①	家政科	21
②	音楽科	5
③	英文科	3
④	国文科	2
⑤	体育助手	1
計		32

⁴ 「国語科」の表記が、「国文国文(国語)科」とあるが資料のままとした。正式には「国語科」である。

⁵ 旧学校名については、各学校のホームページ「沿革」にて確認した。宮城県女子専門学校は、通称「宮

こうした非常事態の中で、新設の国語専攻科は翌春の初卒業にあたり、ぜひとも文部省の中等教員無試験検定資格をとるべく猛勉強を積み重ねた。他学科もこれに協力し、教室や時間割に大幅な便宜を提供したりした。九月二十日の文部省検定委員来校に当り、その実力を示すべき小論文を提出したが、学徒動員に続く戦災下にあつて示された実力は立派なものであった。翌年五月七日の事であつたが、無試験検定が許可された。

「学籍簿」と直接関係はないが、本学の歴史で大切な部分であるこの時期の専攻科の歩みを、整理しておこう。

年月	事柄
1943(昭和18)年4月	従来の家政科・英文科・音楽科に「国語科」が新設され、名称が「専攻部」から「専攻科」となる
1944(昭和19)年5月	専攻科教科修練過程改正許可、家政科が育児科、英文科は外国語科となり国語科・音楽科の四科併設設置、中等学校教員養成に適する課程を履修する
1946(昭和21)年5月 6月	国語科に中等教員無試験検定許可される 専門学校令によって宮城学院女子専門学校の設置が許可される (育児科・国語科・外国(英)語科・音楽科)

ちなみに、1946(昭和21)年3月、宮城高等女学校国語専攻科を卒業した生徒は、「国語専攻科第一回生」と呼ばれる。しかし、同年6月の専門学校令により、本校専攻科は「宮城学院女子専門学校」となったため、1947(昭和22)年3月に卒業した生徒は、「宮城学院女子専門学校国語科第一回生」と呼ばれた。つまり、「宮城高等女学校国語専攻科卒業生」は、この一年度しか存在しないこととなったのである。

次に表4④の「他校進学」10名の内訳を見ると、東北女子職業学校(現・東北生活文化大学)3名、宮城県女子専門学校2名、興健女子専門学校(現・聖路加国際大学)1名、宮城県女子師範学校(現・宮城教育大学)1名、県立保健婦学校1名、松操学校(現・仙台大学)1名、青山学院1名であつた⁵。

最後に表4⑤の「その他」20名の内訳を見る。病気3名、就職(萱場製作所)1名、家

城女専」と呼ばれ、1921(大正10)年に開設された宮城県第二高等女学校の高等科を前身として、1926(大正15)年に創立される。戦後の学制改革により、東北大学に包摂されたのち、1951(昭和26)年廃止となる(『宮城県女子専門学校史』、1986年発行)。県立保健婦学校については、確認することはできなかった。

⁶ 大平聡「挺身隊覚書」(『仙台市史のしおり』Vol.27、仙台市史編さん委員会、2009年)

事手伝い2名、農事手伝い1名、記載なし13名であった。当時、家事手伝い・農事手伝いをする女子は、家庭の中心的働き手とされ、それぞれ「家庭ノ根軸タル者」及び「農業要員タル女子」と呼ばれ、挺身隊の対象から除かれることとなる⁶。

6. 学校挺身隊

最後に表4にみえる①「挺身隊造兵廠」・②「挺身隊」の記述について考える。本学院では、2000年度から、大平教授が中心となり、戦災で原資料の多くが不明になってしまった本学の戦時下の状況について調査研究が開始された。その年の大学祭で同窓会主催の「戦時下の宮城学院展」が開催された。翌2001年度の大学祭では資料室主催として、そして2002年11月に大学学芸員課程と資料室が協力し、さくら野百貨店仙台店でと、計3回にわたり「戦時下の宮城学院展」は開催された。また、学徒勤労働員、当時の学校教育、戦争を経験した方々の証言を聴き取る調査も精力的に行われた⁷。

この度、この一連の調査研究にあたられた大平教授に宮城女学校の「学校挺身隊」の発見経緯を教えていただいた。

- ①2002年、本校卒業生 今野照子（故人）さんから提供された昭和19年の日記（個人日記）に、1月18日に本校で挺身隊出陣式があった記述を発見した。
- ②同窓会に依頼し、挺身隊体験者を探していただき、宮城美恵子（故人）さん、ほかお二人の方と連絡が取れる。
- ③大学祭行事の一環として、公開の聴き取り調査を行う。仙台放送が「戦時下の宮城学院展」準備状況を継続取材していた関係で、この時の司会は、佐藤拓郎アナウンサーに担当していただいた（「さくら野展」、直前のこと）。
- ④急遽、「挺身隊」を「さくら野展」の一章に加える。

これらの調査をまとめた『戦時下の宮城学院』、『戦時下女学校の学徒勤労働員』の二冊は、本学だけでなく「宮城県内の女学校についての戦争」を検証する貴重な資料となっている。『戦時下女学校の学徒勤労働員』6頁より、「女子挺身隊と学校挺身隊」の部分を以下に示す。

女子挺身隊と学校挺身隊

1941（昭和16）年頃から、14歳～25歳（戦争末期には40歳まで引き上げられる）の未就学、未就職の未婚女性を軍需工場などへ動員させるという女子挺身隊が組織された。既婚女性、農業従事の女性は免除された。しかし、強制ではなく希望者だったため、参加は低調だった。1943（昭和18）年12月、政府は、翌年春の卒業生を女子

⁷ 2002年度「戦時下の宮城学院展」の記録、挺身隊に参加された三人の方への聴き取り調査の記録等は、『資料室年報』第9号（2003年5月、73頁-142頁）に紹介されている。

挺身隊として、学校長のもとに編成するよう指示を出した。この女子挺身隊のことを、従来の女子挺身隊と区別し、ここでは「学校挺身隊」と呼ぶことにする。

宮城県の多くの高等女学校で学校挺身隊が組織され（全校かどうか未調査）、3月7日に卒業式を行い、その直後の10日及び12日の2隊に分かれ、動員が実施された。だがこの学校挺身隊への参加も強制ではない上、両親からの反対にあって諦める生徒もおり、後述の学徒勤労働員ほど徹底したものではなかった。例えば宮城高女の参加者は、卒業生89名中16名である。

ほとんどの学校が、卒業後に学校挺身隊を組織したのに対し、宮城高女だけは事情が異なっていた。他校に先駆け、1月18日に学校で壮行式を行い、在学したまま、翌19日、東京第一陸軍造兵廠仙台製造所（通称・原町陸軍造兵廠）に動員されている。そして3月の卒業式には、一時学校へ戻って式に参列している。2ヶ月早い動員の理由は定かではないが、聞き取り調査によると、宮城高女は、当時宮城県で唯一の5年制の女学校だったので（昭和16年度入学者から4年制へ完全移行）、実務へ就くのが他校より遅かった。そういう負い目から、学校は参加を早めたのではないかということだった。動員先は、多くが県内の軍施設であるが、民間工場である日本電気（仙台市長町）に動員された岩沼高女（現・名取高）のような事例もある。

当時、実際に挺身隊へ参加した三人（宮城さん、ほか二人）から話を伺った大平教授によると、宮城さん達は、1月に学校挺身隊として原町陸軍造兵廠へ行き、この時一緒に行った宮城高女の生徒は16名だったという。参加者の集合写真も提供された（写真5）。この聞き取り調査の結果、「本校から学校挺身隊に参加したのは、16名である」という結論に至ったとのことである。

聞き取り調査に協力していただいた三人の学籍簿を見たところ、「卒業後の状況欄」には、「挺身隊造兵廠」と書かれてあり、パターンAのクラスであったことが確認できた。学籍簿に「挺身隊造兵廠」と記載があるのは15名で、この15名が、上記の1月に本校から結成された「学校挺身隊」16名であると思われる。ただし、証言および集合写真と、学籍簿の記載の間には1名の差がある。

しかし、今回の「学籍簿」の調査により、1月に「学校挺身隊」として参加した人数はもう15人いたことが明らかとなった。もう一方のクラス（パターンB）に所属し、「卒業後の状況欄」に「挺身隊員」との記載がある15人である。「学籍簿」を調査した当初は、こちらの「挺身隊員」と記載のある15名は、3月の卒業式後に「学校挺身隊」として組織されたのだと考えた。すなわち参加した時期の違いによって、1月参加者を「挺身隊造兵廠」、3月参加者を「挺身隊員」と書き分けたのではないかと推測した。しかし、この書き分け方は、本稿第三章で述べた通り、担任による書き方の違いであったことがわかった。さらに、学籍簿No.30の生徒の「卒業後の状況欄」に注目したい。そこには、わざわざ



写真5 学校挺身隊壮行式 1944年1月18日(宮城美恵子さんご提供)

ざ「挺身隊三月入隊」とある。あえて、「三月」と入隊月を明記していることは、この生徒だけが違った時期の入隊であったことを示しているのであろう。これらのことから、学籍簿の「卒業後の状況欄」にある「挺身隊造兵廠」15名、「学校挺身隊」15名は、3月に入隊した1名を除く29名が、本校から1月に「学校挺身隊」として出動したものと考えるを得ない。さらに、この時の「入隊者」の集合写真として掲載されてきた宮城さんご提供の写真は一クラス分(パターンA)のものであり、もう一クラス分(パターンB)の集合写真が別に存在するものと推測される。これまで、16名(証言)、20名(今野照子さん日記)、25名(『橄欖』23号)と伝えられてきた宮城高等女学校の学校挺身隊は30名と考えるおさなければならぬという結論に至る。

おわりに

前章で、『橄欖』23号(1944年3月25日発行)には挺身隊参加者が25名であったと述べた。23号は、終刊号であり、彼女たち(1943年度生)の卒業後に発行された。その頁数は16頁にも及んだが、1月18日に行われた挺身隊壮行式の記事は、驚くほど小さかった。その記事と「編輯後記」(一部抜粋)を最後に紹介する。

・～各科だより(女学校)～ 一部抜粋

市内各女学校の囁失として五年の挺身隊員二十五名が去る一月十八日原町^{原文ママ}○○○へ発った。午後一時その壮行式を大講堂で行ふ。校長先生から慈愛にみちた激励の辞に答へて隊員代表の力強い誓言があり、次いで「海行かば」の合唱を以て式を終へた。式直後直ちに戦意昂揚愛国歌合唱祭が開かれた。女学部は各学年に、専攻科は音楽科と他の科とに分かれ、それぞれ力一杯に米英撃滅の血を湧きたたせながら歌ふ。合唱祭終るやはやくも原町からお迎へのトラックが来る。在校生達の「萬歳」に送られつつ搭乗した隊員達は一路戦場へ。二十一日、校長先生、島先生が隊員の激励かたがた工場を見学しておいでになる。「みんな張り切って心から愉しさうです」のお言葉に、下級生達は皆出勤の許される日を待つことしきりである。

・～編輯後記より～ 一部抜粋

本号の原稿はすでに十一月に集つてゐたが、いろいろな理由で今日に至った。その間情勢は随分と変化した。だからもっともって載せたいものの訴へたいものがたくさんあった。たとへば本科女子挺身隊結成のことなどである。この記事はもっと大きく特輯したかったのだが、今は是非もない。……………(石井)

編集後記(石井昌光)から、挺身隊について大きく取り上げたかったという思いは伝わるが、23号で最も多く頁を割いた記事は、生徒たちの「農繁託児所の勤労日記」であった。慣れないながらも生徒たちが一生懸命、農村の子供たちを世話した様子が日記から伝わってくる。

『橄欖』23号を以て、本校に組織された「挺身隊」についての記事は、本校の歴史から消えてしまった。なぜ、消えてしまったのかについては、今のところ不明である。

「学籍簿」を通して、戦争が生徒たちの「学び舎」での日々にもどのように入り込んで来たのか、その一端を感じ取ることができた。本学資料室に残る戦争関連資料は、決して多くはない。だが、今回の「学籍簿」の調査を通し、埋もれている資料の存在を発見することができた。それにより、当時わからなかった事実を明らかにすることもできた。一つ一つを積み重ね、資料を通して検証することが資料室に課された役割であることを自覚し、今後も、「宮城学院の歴史」に、新たな1ページを加え続けることができるよう努力していきたい。

〈付記〉

宮城美恵子さんからご提供いただいた「挺身隊壮行式」の写真であるが、本稿では一クラス分（パターン A）のものであり、もう一クラス分（パターン B）の集合写真が別に存在するものと推測した。しかし、この写真がクラス単位での挺身隊参加者集合写真なのか、クラスに関係なく撮った写真なのか、今となってはもはや確認することはできない。

「宮城高等女学校挺身隊」やこの写真についてご存知の方がいらっしゃいましたら、資料室まで是非ご連絡ください。